

一川島正次郎元総長の業績ー強い母校愛、教育への熱情 富士山中湖セミナーハウス・川島記念館



12月にオープンする「富士山中湖セミナーハウス・川島記念館」は、川島正次郎元総長の政子夫人より遺贈された資金を活用していることもあり、同施設内には川島先生の遺徳を顕彰する記念展示室や庭園もあわせて設けられることとなった。ここで、川島先生の政界における業績と専修大学とのかかわりを紹介したい。

本学を卒業、政界の重鎮に  
【生い立ち】

川島先生は1890年(明23)7月10日、東京日本橋に、父・柳原謙次郎、母・コウの三男として生まれた。母は正次郎出生後間もなく死去。正次郎は日本橋で鼈甲屋を営む川島才次郎家に養子入籍し川島姓となった。

久松小学校(尋常小学校4年、尋常高等小学校4年)を出たところで中学への進学を希望したが父親から「鼈甲屋を手伝え」と言われ、1年間商売の見習いをした。

【専修大学へ入学】

その後、正則英語学校と神田中学の夜学に通いながら内務省に筆生として就職、合わせて1912年(大正元)本学の前進である専修学校専門部経済科に入学、14年(大3)に卒業後、内務省警保局に採用された。

そこで時の後藤新平内務大臣の知遇を得た。内務省を辞め、東京日日新聞社(現毎日新聞社)の政治部記者となったが、後藤が東京市長に就任したのを受け秘書に採用され、初代商工課の課長となった。

【政界へ】

28年(昭3)、衆議院総選挙で養父の出身地千葉から出馬し初当選、37歳の青年代議士が誕生した。以後連続当選14回、衆議院在職36年4ヵ月を務めた。

戦後、55年(昭30)に政界にカムバックを果たし、第二次鳩山一郎内閣で自治庁長官、行政管理庁長官、岸信介内閣時代は名幹事長と言われ、新安保条約締結に貢献した。61年(昭36)の池田勇人内閣では行政管理庁長官、北海道開発庁長官を務め、翌年、東京五輪担当相としてその準備に当たった。64年(昭39)には自民党副総裁に就任、池田首相引退から佐藤栄作総裁誕生までのドラマチックな演出を描いたことは語り草となっている。

外交面では、東南アジア、中近東、アメリカ、南米、ソ連、東欧を訪問しているが、特にAA(アジア・アフリカ)会議十周年記念式典に政府特使として参加したとき、インドネシアのスカルノ大統領と共に中国の周恩来首相と会談、日中関係の調整的役割を果たした。

本学の発展に大きく寄与

【専修大学理事長・総長】

一方、本学においては、52年(昭27)に法人の理事・評議員、53年(昭28)に理事長に就任、以後58年(昭33)名誉総長を経て、61年(昭36)に総長に推戴され、経営に腐心し、入学式、卒業式はもとより、式典や校友会の総会・支部会にも努めて出席、学生、校友とも気軽に接触をはかり、建学の精神を説くなど象徴的存在として信望を集め、その強い母校愛と教育に対する熱情が本学の発展に大きく寄与したことは周知である。

【逝去】

そして、70年(昭45)11月9日、大田区山王の自宅で急逝された。享年80歳。13日には自民党、専修大学、千葉工業大学の合同葬儀が日本武道館で営まれ、葬儀委員長の佐藤栄作首相ほか、政界重鎮の弔辞に続き、相馬勝夫専修大学長が悔やみの言葉を述べた。専大鳳管弦楽団の校歌演奏が葬送の曲となって参列者が献花を行った。

【餞の言葉】

亡くなる前の同年3月、日本武道館での卒業式で川島総長は「諸君への餞の言葉を送りたい。泥にまみれた著名人になるよりも、善良で愛と親切に徹した社会人として立派な社会づくりに参加してほしい。私は今年すでに80歳、おそらく再び会う機会はないうであります。どうか諸君、専修大学の先輩である川島正次郎のこの片言隻句を、心の隅に留めていただけるならば、私としても喜びであります。どうか諸君、長い人生です。明るい豊かな暮らしをしてください。そして社会のために尽くしてください。さようなら、さようなら！」と手をあげて祝辞が述べられたあと、場内は感動の拍手が鳴りやまなかったという。

まさに川島先生への敬愛の極みであった。

### 【川島記念賞】

現在残る『川島記念賞』は、先生の遺徳を顕彰し、寄贈のあった基金を基に「川島記念学生表彰基金」として専修大学、石巻専修大学、専修大学北海道短期大学の学術奨励と体育振興並びに各付属高等学校の生徒の勉学奨励を担っている。

### 【要職・叙勲】

この他、日本学生卓球連盟会長、日本ボウリング協議会総裁、日本消防協会会長、江戸消防記念会名誉会長、江戸火消防存会会長、日本プロレスリングコミッショナーなど各分野の要職を務めた。  
65年(昭40)勲一等旭日大綬章、70年(昭45)従二位勲一等桐花大綬章を受章。

〔11月15日/ニュース専修10面〕